〔研究ノート〕メディア政治家・上田哲の足跡

長﨑　励朗

一　はじめに

二〇二〇年初旬から世界的な感染拡大を見せた新型コロナウイルスは、二年が経過した現在にいたるまでメディア報道の中心であり続けている。日々刻々と増減を繰り返す感染者数は、この二年間、メディアの議題設定を独占し続けたと言えるだろう。

未曽有の感染症パニックで様々な対策が遅きに失するなか、こうした感染者数を伝える報道がいち早く整備されたことを疑問に感じた日本人はそう多くない。政府が公式発表した数字をマス・メディアが右から左へ流すように報道しているようにしか見えないからだ。

しかし実は、感染者数を全国で集計し、正確にマス・メディアで報じるというシステムの原型は、現在から遡ること約六〇年前、一九六一年にメディアの側が主体となって形成されたものである。当時、毎年のように流行していたポリオを撲滅するため、ＮＨＫの側が主体となって大々的なキャンペーンを行なった。その中で生まれてきたのが、感染者の集計システムである。

キャンペーンの中核を担った人物は上田哲。労働組合の委員長を務め、「ＮＨＫの闇将軍」とまで呼ばれた上田は、放送記者時代にこうしたキャンペーンを張るなどの業績を残し、その後、社会党の国会議員へと転身。そこから約二五年もの間、議席を保ち続けた戦後を代

表する大物メディア政治家の一人である。

メディアの側から政治を動かすことで現在にまでつながるシステムを構築し、かつ長らく国会議員も務めあげた上田に着目することは、政治とメディアの関係を考える上で重要なヒントを与えてくれるはずである。

本稿では、上田哲を研究するための予備調査として、自伝をもとに彼が政治家になるまでの活動を概観してみたい。

二　青春時代

一九二八年二月二八日、上田哲は東京の大塚に生まれた。後に彼はこの時期に生まれたことが自身に強い影響を及ぼしたと述懐している。

三十年あまりたって、戦後の青春世代は三つになったと私は考える。私はその第二世代。

同じく戦後に青春を送ったなかでも、第一世代は青春の一部を戦中にもつ。第二世代は戦後に青春を開く。第一世代は銃を担って戦場に送られた側であり、第二世代は軍歌を歌ってそれを送った側である（二）。戦争の被害を免れたという一種の「罪障感」から無邪気に「同期の桜」を歌うことができない自分を発見し、上田はこの「第二世代」に属していることを強く意識するようになったと語る。後に野党第一党の政治家となっていく下地には、こうした背景を見てとることもできる。

早くに父を亡くした上田は終戦の年の四月、空襲で家を焼け出され、母方の祖父母の故郷であった滋賀県能登川町に母と弟と一度は疎開した。しかし、父の親友であった朝日新聞論説委員の小幡操のすすめで、ほとんど日を置かず東京に引き返している。やがて七月には旧制新潟高校に入学。上田の大学生活は終戦のわずか四五日前に始まったのである。

この新潟高校はナンバリングされていない中では最

初に設置された旧制高校であり、それ以前に設置された学校と同じく、蛮カラの気風が強かった。そんな中、上田は寮の自治制度をめぐって、後に小説家として活躍することになる上級生の丸谷才一と対決したり、終戦後初の自治会設立を主導したりと活発に自治活動に関与していく。後に演説の名手とされた上田のルーツはこのあたりにも見出せるかもしれない。

当時の旧制高校の学生は大部分が大学に進学するのが常だったが、上田は一九四八年七月に卒業してすぐに一度就職している。東京に出て、住み込みで釜のセールスマンをやっていたというが、上田にとってこの環境は耐え難かった。プライバシーのない生活の中で、社長の愛人とされる「支店長」から投げかけられた次のような言葉は、教養主義の香りが色濃く残る旧制高校で青春時代を送った上田の意気を挫くものであった。

「商売人に人格などはいりませんぇ。よろしいか。学問などは学者にまかせなさい。あなたは本を読みすぎますのえ。帳簿を読むのがええのです。お金がでければ、また本が買えるでしょうが。わかりますか」

本を読むなといって、もうけた金で買う本なら読んでいいというのも矛盾だが、支店長の頭ではちゃんと起承転結、おさまりがついている。それより、人格と私がいうのは「ひととなり」というほどの意味だったのだが、私が二宮尊徳のようなものをめざしているらしいと思いこんで、支店長は委細かまわず二宮尊徳が実は商人として立派だったという話をする(一)。

ここに登場する「支店長」が述べている内容は立身出世と結びついた日本型教養主義であり、旧制高校の三年間、教養主義的寮生文化に浸かっていた上田とは相いれないものである。教養主義はその出発点である明治期においては修養と一定の連続性を持っていたものの、その後の展開としてはむしろ立身出世と距離をとることで、純粋に西洋的知に接近し、それによって人格陶冶

を目指すものだからだ(三)。

くわえて、本を読むことも咎められる状況は、もう少し後の時代に集団就職した非大卒者たちが味わった苦悩を先取りしている(四)。

こうした状況に耐えかねた上田は約三ヶ月で職を辞し、母のいる滋賀県に戻って能登川西小学校の教員となる。さらに、一九五〇年には新制彦根高校に職を得た。上田のように大学に進学しなかった旧制高校卒の人間は「白線浪人」と呼ばれ、当時、就職するのが難しかった。腰掛けの仕事を探しているとみなされたからである。それでも、こうして職を得ることができたのは、各学校の校長や周囲の人間の助力があってのことであった。その時の感謝をこめて、上田は当時の状況を自伝で率直に語っている。

そんな状況にあった上田だが、就職して間もなく、旧制高校から大学に進学する制度が廃止される最後の年度であることを知らされる。「腰掛け」ではないという約束を信じてくれた校長の手前、上田は悩みに悩んだが、自身を冷遇する保守的な他の教員への意地から、とにもかくにも、京都大学法学部の受験を決めた。

結果は見事合格。彦根高校の校長も大学に通うことを快く受け入れてくれ、一九五一年に入学した上田は大学四年間、彦根高校で教鞭をとりながら勤労学生として過ごすこととなった。

この頃、上田が暮らしていた彦根の下宿をよく訪れていた彦根高校の学生たちは、後に様々な分野で一流の業績をあげていく。そんな学生たちの中に、テレビディレクターとして有名な田原総一朗もいた。後に政治家になったあと、上田は『朝まで生テレビ』にも複数回出演しているから、図らずもメディア上で師弟共演を果たしていたことになる。

その後、四年で卒業に漕ぎつけた上田は、一九五四年三月、いよいよＮＨＫに入社する。これはテレビ放送が開始された翌年であり、まだ放送が新聞を超えるかどうかは微妙とされていた時期であった。その意味で、上田の放送記者時代は、ＮＨＫや民放各局がテレビの可

能性を開拓していく過程とピタリと重なる。以下ではＮＨＫ入社後の上田の活躍に目を向けてみたい。

三　放送記者時代―ポリオ撲滅キャンペーン

一九五四年に晴れてＮＨＫに入社した上田は、早速、政府とマスコミの葛藤を目の当たりにすることになった。三木鶏郎の人気ラジオ番組『ユーモア劇場』が、政府側の圧力でつぶされようとしていたのである(五)。戦後まもなく放送を開始し、『歌の新聞』『日曜娯楽版』と名前を変えながらも存続してきた『ユーモア劇場』は、番組聴取者からの投稿をもとに社会風刺を含んだコントや歌を放送することで、当時、人気を博していた。この『ユーモア劇場』が、議員をはじめ多くの逮捕者を出した「造船疑獄事件」をめぐって痛烈な風刺をおこなったことで、政府与党から圧力がかかったのである。

折しもＮＨＫが受信料の値上げを検討していた時期でもあり、当時の郵政大臣が記者会見で公然と、「このままでは受信料を値上げすることはできない」と言い放った。上田ら新人記者たちは、『ユーモア劇場』消滅と引き換えになるぐらいなら、新人は全員、ベースアップを辞退するとまで宣言したが、結局、この番組は終了してしまう。

こうした記者時代の状況を振り返って、上田は次のように述べている。

> テレビ創業の時代に記者としてスタートした私は、ちょうど放送がマスコミの首座を占めていく過程と、それに権力のかかわる度合いとを、じっとみつめてきた思いが強い。権力は長くＮＨＫを自己の下僕と考えてきた。だから、戦後第二世代、民主主義世代である私のＮＨＫ生活は言論の自由をめぐる反権力の意識に終始する(六)。

現在にいたるまで幾度となく繰り返されてきた政府とＮＨＫの関係性に対する批判は、上田が放送記者とし

てのキャリアを歩み始めた頃に始まったのである。こうした上田の「反権力」意識は、ジャーナリストが錦の御旗のように掲げる月並みな権力批判と似ているように見える。しかし、後述するポリオ撲滅キャンペーンの際の動きを見れば、彼がそこに終始するだけのジャーナリストではなかったことが分かるはずだ。ひとまず、そこにいたるまでの上田の仕事を確認しておこう。

ＮＨＫに入社後、上田があげた最初のスクープは一九五九年の偽札事件であった。友人からの情報で最初の一枚を手にした上田は、各所で鑑定を依頼し、記事を執筆しつつも、特ダネを守るため、これを握って行方をくらました。困った警視庁から自宅を家宅捜索すると言われて、ようやく姿をあらわしたという(七)。

こうした上田の行動には明確な意図があった。新聞に追従しがちだった放送がテレビを抜くということにやっきになっていたのである。当時はまだ、それほどに新聞の地位が高かったのである。

その翌年、一九六〇年に上田は三池闘争を取材するなかで、労働者側の敗北を目の当たりにする。上田はこの事件について「今後長く日本の労使関係に苦しい時期を予告するもの」であり、「民主主義の自然成長を労働者の体のなかで信ずることのできた〝戦後時代〟は、ここで終ったといわねばならない」とまで述べている(八)。

こうした認識は後に上田が組合のトップになっていくにあたって、大きな影響を残した。「三池は戦後を荒々しく葬送する一九六〇年の古戦場であって、この体験は強烈な組合運動への刺激と教訓を私に残した」と上田は回顧している(九)。

上田がポリオ撲滅キャンペーンに乗り出したのはこの直後である。この上田の活動にも、三池闘争は大きな影を落としていた。当時の心境について上田は次のように記している。

安保や三池の敗退のあと、政治にかかわるテーマは、もうマスコミの主張する課題とはなりえないことを、

ひしひしと感じさせた。私のみつけたこどものいのちを守るテーマを追求することで、テレビの社会的可能性のなかに、権力を越えるジャーナリズムの〝あと半分の〟成立を賭けてみるしかないではないか（一〇）。

この発言の意図については今後より深く検討する余地があるものの、ポリオ撲滅キャンペーンの顛末を見れば、この時の上田がもはや単なる「反権力」のみをスローガンとするジャーナリストを越える存在になろうとしていたことがわかる。上田は官僚に対して、ＮＨＫの力を使うよう持ち掛けたのだ。

一九六〇年、上田はまだ未承認だった生ワクチンがポリオをほぼ根絶する効果を有していることを知る。これを報道しようとするが、報道局は上田の提案を無視し続けた。そこで翌年、上田は厚生省の防疫課長にキャンペーンを持ち掛ける。上田の熱意と計画に後押しされた厚生省は各県の衛生部に異例の通達を出した。ポリオの実態調査のためにＮＨＫに協力するように、というものだった。これによって同年四月一五日から全国で即日調査が開始される。当時の集計は次のようなシステムで回っていたという。

日本中で発生するポリオ患者を、正確に医師から保健所へ報告を求めるのが午後五時半。保健所から各県衛生部へ報告をまとめる。それが六時半。それらをＮＨＫ各放送局でまとめるのが七時、それを東京ポリオチームがうけ取るのが七時半。一枚の「ポリオ日報」となる。ポリオ日報は「本日発生」「本日死亡」「昨年同日発生」「昨年同日死亡」「本日総計」など横に八コマ、北海道から九州まで縦に六十二コマ、合計四百九十六コマ（一一）。

ここで挙げられている項目は現在の新型コロナ報道と比べても遜色がない。現在の報道体制の原型はこの時すでにできあがっていたといえよう。

この時の「ポリオチーム（上田が勝手に名付けた）」と行政の関わり方は、政治的ないわゆる「権力批判」とは明らかに異なっていた。というのも、政府の公式発表自体がＮＨＫの調査に依っていたからである。毎日厚生省の役人が「ポリオ日報」を写しにきて、それをもとに国会で議論がおこなわれ、政府の公式見解が発表されていたのだ。

連日の報道によって、上田はみごとにメディアの議題設定効果を操って見せた。これにより、生ワクチンが緊急承認される。その舞台裏に起こっていたことを上田は次のように書き残している。

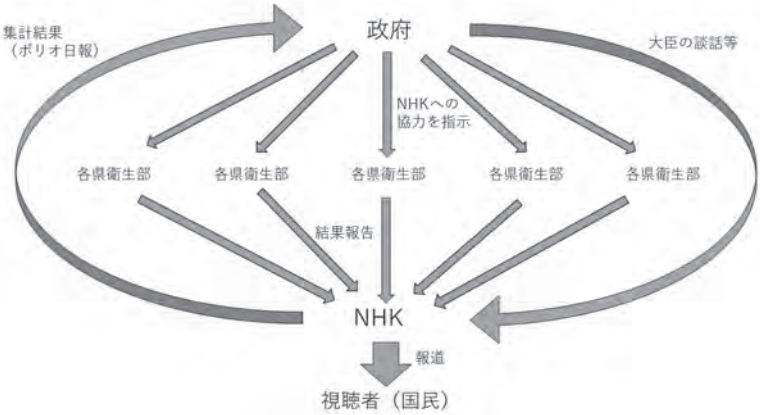
六月二十一日、厚生省はついに千三百人分の緊急投与を決定した。予備費五億円支出で無料投与である。古井厚生大臣は悲愴調の談話をだし、大平官房長官は、

「当方の内情報では六千人の患者発生が予想されるのだ。もはや政治判断だ。」

と語った。「ポリオ日報」が内情報になった。自分の投げたブーメランをつかむように、その官房長官談話をまた私はニュースに書いた（二）。

ここで上田が「ブーメランをつかむように」と形容した動きを図式化すれば、図一のようになる。ＮＨＫの組織を使って集計した結果が政府に渡り、その発表をＮＨＫがまた報じるという、まさに「ブーメラン」的図式である。反権力という理念を固守するのではなく、むしろ権力側に積極的に働きかけることで現実に結果を残したという意味で、こうした上田の業績は、「権力に対する番犬」を越えたジャーナリズムの可能性を示したとも言えよう。

キャンペーンのクライマックスでは、当時の人気番組『私の秘密』にワクチンを運んできたスカンジナビア航空の機長を出演させ、カメラの前で高橋圭三アナウンサーがポリオの生ワクチンを飲んだ。その甲斐あって、七月二一日に実施されたワクチンの一斉投与の



図一　ポリオ撲滅キャンペーンにおける情報の流れ

際には、投与率九一％を記録。八月一七日にはとうとう感染者数ゼロとなった。

本来、裏方であるはずの放送記者だが、この時の上田がよほど目立っていたのか、後に彼をモデルにした映画『われ一粒の麦なれど』が制作され、芸術祭奨励賞を受賞している。上田はこのキャンペーンの成功を踏まえ、次のように述べている。

キャンペーンはマスコミの華である。ただし、これはお祭りではなくたたかいである。だから、キャンペーンには三つの要素があるべきだ。第一に、目標を科学的にたてること、第二にその敵を発見すること、そして、第三に、自分が気違いになることだ（一三）。

その後、上田は労働組合委員長を経て一九六八年に社会党から参議院議員に立候補し、政界入りを果たすことになる。

四　考察と今後の展望

政治家転身後の上田は、一九七九年まで参議院議員、そこから鞍替え出馬して一九九三年に落選するまで衆議院議員を務めあげた。こうした上田の歩みをメディアと政治の関係性の変化と重ね合わせてみると興味深いことが分かる。

佐藤卓己・河崎吉紀編『近代日本のメディア議員』によれば、近代のメディアと政治の関係の変遷は「政治のメディア化」というプロセスとして捉えることができる。ここで言う「政治のメディア化」とは「メディアの論理がメディアの枠を超えて、政治の制度、組織、活動にまで影響力を強めていくプロセス」であり、政治サイドから見れば「政治がメディアへの依存度を高めることで、政治が自立性を失っていくプロセス」としても捉えられる(二四)。

さらに、この「政治のメディア化」プロセスの進展は次の四局面に分けられるという。

Ⅰメディアの成立　議会成立前～一九〇四年
Ⅱメディアの自立化　一九〇八～一九三七年
Ⅲ報道のメディア化　一一九四二～一九六九年
Ⅳ政治のメディア化　一九七二～現在

これを上田の足跡と重ねて見ると、彼はちょうどこの第三期と第四期の変わり目で政治家へと転身していることになる。

第三期、第四期の詳細な定義についても確認しておこう。第三期とは、「マスメディアが企業として発展し、報道は『政治の論理』(価値や理念の実現)より『メディアの論理』(社会的影響力の最大化)に左右されるように」なる時期を指す。一方、第四期とは「政治過程全体が『メディアの論理』で動き始め」、政治の側もメディアの側も「メディア・テクノロジーがもたらす情報環境への最適化を重視」するようになる。この時期になると、政治家自身が『自己メディア化』によるパフォー

マンスを展開」するようになるという（二五）。

こうした理論を踏まえれば、上田のポリオ撲滅キャンペーンは社会的影響力を最大化しようとする「メディアの論理」に則った行動であったとも解釈できる。さらに言えば、そうしたメディアの論理が頭打ちとなり、政治家が「自己メディア化」するようになる時期に政治家に転身した上田は、徹頭徹尾メディア人間であったともいえよう。

面白いことに、政治家となった後の業績については、上田自身、それほど言及していない。政治家としては珍しいタイプであるとも言える。今後は資料として国会議事録等を用いて細かく拾い上げていく必要がありそうだ。

逆に議席を失った後の上田は饒舌である。上田自身の著作は大部分が落選以後に書かれたものだ。最後に落選の顛末とそれが持つ意味についても考察しておきたい。

上田が落選した一九九三年の選挙は、五五年体制の崩壊を告げるものであったと位置づけられる。自民党が分裂し、保守系新党が乱立するとともに、社会党は大きく議席を減らした。このとき、上田は小選挙区制に反対したことで、党指導部と対立。社会党の支持母体であった日本労働組合総連合会（以下連合と記述）から「選別」され、推薦を得られなかった。このときの落選の顛末と今後の社会党のあり方についての考えを綴った『社会党大好き！』は日本地方新聞協会特別賞を受賞している（二六）。

上田落選のかげに連合がいたことは、現代日本の政治史を考える上で興味深い。上田自身がそうであったように、社会党の議員は大企業の労組出身者が多い。その労組をまとめているのが連合だから、現在にいたるまで、連合は常に非自民を支援してきた。しかし、近年になって、連合やそれに支援される野党は実は自民党の補完勢力ではないか、という感覚が広がり始めている。かつては企業（資本家）と労働者という対立軸が意識されていたが、非正規雇用が増えて以後、対立軸は

「企業＋正規労働者」対非正規労働者へと移行したからである。

実際に連合が意図的に自民党を利する方向に動いていたわけではないが、結果として見れば、小選挙区制に反対していた上田のような議員を推薦からはずし、その後の社会党の劇的な縮小を招いた原因の一端は連合にあったのではないか。

もちろん、自民党が勝った方がよいか負けた方がよいかという価値観の問題は人によって様々な判断があろう。ただ、少なくとも連合が労働者一般の味方であるという感覚は一度見直した方がよい。五五年体制で印象付けられたイデオロギー闘争の裏で現実を動かしていた社会的構造にこそ、目を向けるべきなのだ。

その意味で、上田哲という人物を研究することはメディアと政治家の関わりのみならず、労働組合という存在自体のあり方を考える上でも今後、有益な示唆を与えてくれるはずである。

(一) 上田哲『歌ってよいか、友よ』講談社、一九七八年、八頁。
(二) 上田哲、前掲書、一二二頁。
(三) 筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波書店、一九九五年。および竹内洋『立身出世主義―近代日本のロマンと欲望〈増補版〉』世界思想社、二〇〇五年。
(四) 福間良明『「働く青年」と教養の戦後史―「人生雑誌」と読者のゆくえ』筑摩書房、二〇一七年。
(五) ただし、政府側は関与を否定している。
(六) 上田哲、前掲書、二三九頁。
(七) 上田哲、前掲書、二六六―二六七頁。
(八) 上田哲、前掲書、二八〇頁。
(九) 上田哲、前掲書、二八〇頁。
(一〇) 上田哲、前掲書、二八八頁。
(一一) 上田哲、前掲書、二九〇頁。
(一二) 上田哲、前掲書、二九五頁。
(一三) 上田哲、前掲書、三〇〇頁。
(一四) 佐藤卓己・河崎吉紀編著『近代日本のメディア議員〈政治のメディア化〉の歴史社会学』創元社、二〇一八年、一六頁。
(一五) 佐藤卓己・河崎吉紀編著、前掲書、一六頁。
(一六) 上田哲『社会党大好き！！』データハウス、一九九三年。